作戦の実行を楽しむことができる児童の育成
～３つの視点で作戦を考えるフラッグフットボールの実践を通して～

胎内市立中条小学校　三富　貴大（平成２３年度）

主張
本研究は、フラッグフットボール(ゴール型)で攻撃の作戦を考えるときに、「①攻撃の方向」、「②役割分担」、「③守りを意識した工夫」の３つの視点で作戦を考えることで、話し合いの質が高まり、作戦の実行を楽しむことができる児童の育成をねらった研究である。また、児童の気づきや困り感をもとに、各時間の課題を焦点化し、児童が意識する動きを限定していく。段階的に課題に向き合うことで、作戦の立て方や動き方を身に付けようとした。
その結果、児童は、視点を与えたことで話し合いが上達し、作戦の実行を楽しむ児童が増加した。

１　研究主題設定の理由

（1）主題設定に至る子どもの実態と課題

これまでのゴール型、及びゴール型ゲームのボール運動の実践を振り返ると、技能や思考レベルが高い児童だけが活躍し、見ているだけでゲームに積極的に参加できない児童が多く見られた。ボール運動が苦手で自信がもてない児童にとって、「変な動きをしたらどうしよう」や「これでいいのかな」という不安が、ゲームへの参加を消極的にしてしまうのではないかと考える。ゲームに積極的に参加するには、自分がゲームの中でどのように動けばよいかを具体的に理解する必要がある。

児童間の技能差がある中でも、チームで作戦を考え、個々の動きを具体的に理解して実行することできれば、積極的に楽しみながらゲームに参加できる児童を育てられるのではないかと考えた。しかし、ゴール型ゲームは、集団対集団で行われることから、自分以外の味方や相手の動きを理解することが求められる。得点をするために作戦を実行するには、チームで動きを合わせ、各々の思考のズレをできるだけなくす必要がある。

そこで、本研究では、「チームでの作戦の立案と実行」に焦点を当て実践を行おうとした。しかし、運動が苦手な子にとって、たくさん作戦の内容を理解することは難しく、作戦の理解が不十分になることで自分の動きに不安が生じてくるのではないかと考える。それよりも、作戦を限定し、焦点化した個々の動きを確認しながら話し合うことで、「自分の動き方が分かる。これならできそう。」という思いを高められるのではないかと考える。また、運動時間も確保するためにも、短い時間で具体的な作戦を立てられるような効率の良い話し合いをさせたい。そのために、限定した作戦を軸に、作戦を立案し実行させたい。

（2）課題解決のための方策

「① 攻撃の方向」×「②役割分担」×「③守りを意識した工夫」からの選択

フラッグフットボールの経験がない児童にとって、一から複雑な作戦を考えることは難しい。しかし、大雑把なＡ、Ｂ、Ｃ・・・のような限られた作戦の場合には修正が難しい。そこで、考えることの軸になる３つの視点を与え作戦を考えようとした。作戦の「①攻撃の方向」のパターンを決め、そこに「②役割分担」をどうするか、「③守りを意識した工夫」をどのように加えるかを選択させる。そうすることで、考えるときの視点や手順が明確になり、作戦の具体的な立案と修正をチームで共有できると考えた。

①攻撃の方向	②役割分担	③守りを意識した工夫
・右サイドを攻める	・ボール保持者	・壁になってコースを作る
・左サイドを攻める	・アシスト(惑わす、ブロック)	・ボールを隠す
・中央から攻める	・アシスト(惑わす、ブロック)	・スタートの仕方

研究仮説

フラッグフットボールのアウトナンバーゲームで、「①攻撃の方向」、「②役割分担」、「③守りを意識した工夫」の３つの視点で作戦を考えることで、話し合いの質が高まり、作戦の実行を楽しむことができるだろう。

２　研究の実際　（単元「フラッグフットボール」４年生 39 名　男子 19 名　女子 20 名）

児童の気づきや困り感をもとに、各時間の課題を焦点化し、児童が意識する動きを限定していく。段階的(①基本的な作戦の考え方、②守りを意識した作戦の考え方)に課題に向き合うことで、作戦の立て方や動き方を身に付けていく単元計画を考えた（図１）。

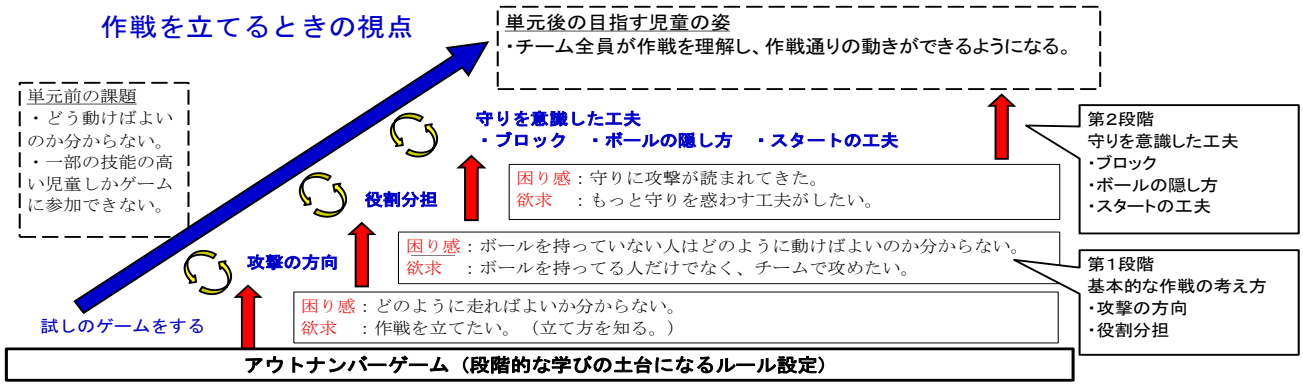
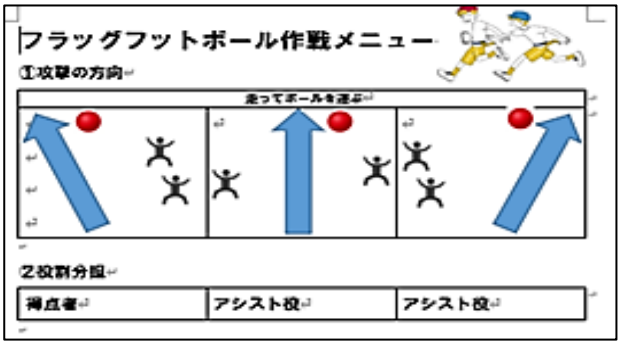


図１　「作戦における動き方」を段階的に学ぶ学習過程

(1) 基本的な作戦の考え方を知る（２～３時間目）

・「①攻撃の方向」を知る（２時間目）

ボールを運ぶ方向を左サイド、中央、右サイドのうち、どのルートやスペースを使うかを決めることから教えた。攻撃の方向を決めることで、これを軸に作戦を考えようとした。攻撃の方向について話をしたときに、ボールを持って走る人の方向が決まると、「ボールを持っていない人は違う方向に走った方がいい。」といった会話が子どもたちから生まれ、役割についての意識が次時へとつながっていった。



・「②役割分担」を知る（３時間目）

誰が最後ボールを持ってゴールゾーンにいるのかを決め、他の人はどのような役割があるのかを考えた。「相手を引き付けて、ボールを持っている人がフリーになるようにしたい。」と話しだし、「相手をだます」意識が高まっていた。また、味方を生かすための動きを考えるようになり、「個人」でなく「チーム」に対する意識が強まっていった。

（２）「③守りを意識した工夫」を知る（４～６時間目）

基本的な作戦の考え方を身に付けられたことで、作戦を共有し、実行できる姿が増えたが、守りに阻まれ得点できない場面が増えてきた。攻め方への理解（相手をいかにだますか）の高まりにともない、守り方の理解も進んできたからだと考える。そこで、作戦の中に守りを意識した視点を与えることで作戦の質をさらに向上させようと考えた。守りを意識した３つの視点を教師側から段階的に示すことで、意図した動きの気付きを増やし、それらの動きのポイントを確認しながら学習を進めた。

・ブロック（かべを作って走るコースを作る）（４時間目）

ボールを持っていない人の動き方に「相手を引き付ける」以外の動きがあることを教えた。あえて味方に近づき、走るコースを作ることでボールを持っている人の動きにも変化があった。走る方向を切り替え、ブロックしてくれる味方の方へコースを変えるなどの動きが増えた。

・ボールを隠す（５時間目）

誰がボールを持っているかを相手に悟られないことが重要であることを子どもたちは考えていて、そのためのボールの持ち方の様々な方法を考えさせた。ボール背中に隠したり、味方同士で密着したりするなどし出した。相手チームの動きを自チームに取り入れる様子が見られ、子どもたちたちの作戦の幅も増え出してきた。

・スタートの仕方（６時間目）

ある程度自分たちで作戦を考えて試せるようになり、子どもたちは「スタート」で勝負が決まることが分かりだし、スタートでいかに相手を惑わすかについて考えていた。ボールを渡すふりをいれたり、スタートの位置を変えてみたりするなどを試していた。今までの学んだ内容を組み合わせられるようになり、子どもたちが考える作戦のレベルが高まっていた。

３　結論

（１）作戦を考える質の向上

①作戦の話し合いにおける３つの視点に関する言葉の増加

学習の最初の頃は、スローガン的な作戦や、時間内に作戦が決められないことが多かったが、回数を重ねるごとに「○○さんがおとり」「タイミング」といった作戦に必要な言葉が増加した。作戦の動きを表す言葉を共有し、組み合わせることができたことで、イメージをできるようになってきた。

②プレーの想定やプレー後の作戦の修正をする発言の増加

自分たちが考えた作戦がうまくいかなったときを想定する会話（「もし相手がおとりに引きつけられなかったら、助けに(ブロックに)行くよ。」）、また、作戦の修正にかかわる会話（「スタートのタイミングが遅れたから、次はみんなで揃えよう。」）が見られ、ゲーム上で起こりうる場面を想定し、自分達で細かい作戦の修正ができるようになった。

（２）作戦の意図が見られる動きの増加（抽出チームの動きの変容）

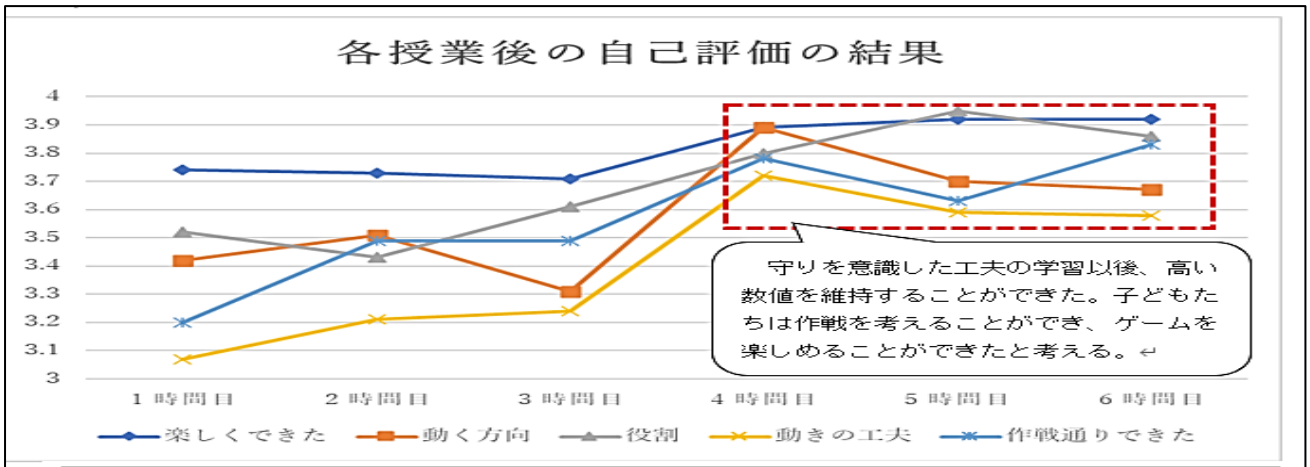
単元の最初の頃は、個人に頼った動きや、動きが分からなくなり止まってしまう姿が多く見られたが、「①攻撃の方向」と「②役割の分担」を考えながら作戦を考え出すようになると、自分だけでなく味方の動きや役割を考えて連動するような動きが見られるようになった。さらに、「③守りを意識した工夫」の視点で作戦を考えるようになると、守りを惑わす工夫を加えプレーする姿が多くみられるようになった。

（３）作戦の実行を楽しむ児童の向上（図３）

①アンケートの回答の平均値の向上

アンケートの「フラッグフットボールを楽しむことができた」回答が学習を通して数値が上昇した。作戦の話し合いを充実させるだけの知識や自分の動きが分かったことで、チームでの話し合いの満足

度が上がり、話し合いがうまくいくから、作戦を実行してみたい気持ちが高まったり、自分たちの作戦が成功した喜びや改善させる楽しみを味わえるようになったりしたからだと考える。



試しのゲーム	（１）基本的な作戦の考え方		（２）守りを意識した工夫		
	①攻撃の方向	②役割分担	①ブロック	②ボールを隠す	③スタートの工夫
１時間目	２時間目	３時間目	４時間目	５時間目	６時間目

図３（児童３９人の平均値）

②ポジティブな発言と関わりの増

５時間目、６時間目の抽出チームの会話の中で、ポジティブな発言が増えた様子が見られた。チームの関係性が良くなり、失敗をミスではなく、次のプレーのヒントとして捉えられるようになったことで、不安が消え、前向きなチームの関わりが増えてきた。また、個人の失敗からチームの失敗へと失敗の意味が変わったで、失敗を恐れず、作戦を実行する児童が増えていった。

４　研究の反省

（１）　児童が作戦をどのように共有したのかを明らかにできなかったこと

３つの視点を段階的に与え作戦を考えさせたことで、話し合いの質の高まりと共に、作戦の意図を感じるチームでのプレーが増えていったが、共有に効果的だった授業者の働きかけや、児童同士のかかわりについて見取りきれなかった。

（２）　児童に作戦の実行のために必要な状況判断の感覚を磨いていくこと

５時間目における「攻撃の方向」「守りを意識した工夫」「作戦通りの動きができた」の項目を見ると、自己評価の結果の数値が下がっていた。個人の自己評価の結果からも「守りを意識した工夫」６名、「作戦通りの動きができた」８名、「作戦通りの動きができた」８名が前時よりも低い評価を行っていた。

数値が落ちていた児童の実際のゲームでの様子を確認すると、瞬間の状況判断をする力が弱い傾向にあった。例えば、ボールを背中に隠しスタートした場面で、守りに気づかれた後は、ボールを走りやすい持ち方に変え全力で走ったほうがよいのに、いつまでも背中に隠したまま走っていた。ボールを隠すための動きが何のためで、いつまで必要なのかを理解できていないようだった。

「守りの動き方や視線」、「守りと自分の距離」等に着目させることで、自分の行動を選択する手助けにできたかもしれない。次の実践では、併せて指導していきたい。